

文字禍

中島敦

青空文庫

文字の靈れいなどというものが、一体、あるものか、どうか。

アツシリヤ人は無数の精靈を知っている。夜、闇やみの中を跳ちようりよう梁するリル、その雌めすのリツ、疫えきびよう病をふり撒まくナムタル、死者の靈エテインム、誘ゆうかいしや拐者ラバス等など、数知れぬ悪あくりよう靈共がアツシリヤの空に充みち満ちている。しかし、文字の精靈については、まだ誰だれも聞いたことがない。

その頃ころ——というのは、アシュル・バニ・アパル大王の治世第二十年目の頃だが——二ネヴェの宮きゆうてい廷に妙みような噂うわさがあつた。毎夜、図書館の闇の中で、ひそひそと怪あやしい話し声がするという。王兄シヤマシユ・シユム・ウキンの謀むほん叛がバビロンの落城でようやく鎮しずまつたばかりのこととて、何かまた、不逞ふていの徒の陰いんぼう謀ではないかと探つてみたが、それらしい様子もない。どうしても何かの精靈どもの話し声に違ちがいない。最近に王の前で処しよけい刑されたバビロンからの俘ふしゆう囚共の死靈の声だろうという者もあつたが、それが本当でないことは誰にも判わかる。千に余るバビロンの俘囚はことごとく舌を抜ぬいて殺され、その舌を集めたところ、小さな築つきやま山が出来たのは、誰知らぬ者のない事実である。舌の無い死靈に、しゃべれる訳がない。星ほしうらない占うらないや羊肝ようかん卜ぼくで空むなしく探たん索さくした後、これはどうしても書物

共あるいは文字共の話し声と考えるより外はなくなつた。ただ、文字の靈（というものが在るとして）とはいかなる性質をもつものか、それが皆目判らない。アシユル・バニ・アパル大王は巨眼縮髪きよがんしゆくはつの老博士ナブ・アへ・エリバを召して、この未知の精靈についての研究を命じたもうた。

その日以来、ナブ・アへ・エリバ博士は、日ごと問題の図書館（それは、その後二百年にして地下に埋没し、更に二千三百年にして偶然発掘される運命をもつものであるが）に通つて万巻の書に目をさらしつゝ研鑽けんさんに耽つた。両河地方では埃及と違つて紙ペ草ビルスを産しない。人々は、粘土の板に硬筆こうひつをもつて複雑な楔形くさびがたの符号ふごうを彫りつけておつた。書物は瓦かわらであり、図書館は瀬戸物屋せとものやの倉庫に似ていた。老博士の卓子テーブル（その脚には、本物の獅子ししの足が、爪つめさえそのままに使われている）の上には、毎日、累累るるたる瓦の山がうずたかく積まれた。それら重量ある古知識の中から、彼は、文字の靈についてつかきの説を見出みいだそうとしたが、無駄むだであつた。文字はボルシツパなるナブウの神の司りたもう所ほかとより外には何事も記されていないのである。文字に靈ありや無しやを、彼は自力で解決せねばならぬ。博士は書物を離れ、ただ一つの文字を前に、終日それと睨めつこをして過した。卜者ぼくしやは羊の肝臓かんぞうを凝視ぎようしすることによつてすべての事象を直観する。彼もこ

れに倣^{なら}つて凝視と静観とによつて真実を見出そうとしたのである。その中に、おかしな事が起つた。一つの文字を長く見詰^{みつ}めている中に、いつしかその文字が解体して、意味の無い一つ一つの線の交錯^{こうさく}としか見えなくなつて来る。単なる線の集りが、なぜ、そういう音とそういう意味とを有^もつことが出来るのか、どうしても解^{わか}らなくなつて来る。老儒^{ろうじゆ}ナブ・アへ・エリバは、生れて初めてこの不思議な事実を発見して、驚^{おどろ}いた。今まで七十年の間当然と思つて看過していたことが、決して当然でも必然でもない。彼は眼^めから鱗^{こけら}の落ちた思がした。単なるバラバラの線に、一定の音と一定の意味とを有たせるものは、何か？　ここまで思い到^{いた}つた時、老博士は躊躇^{ちゆうちよ}なく、文字の靈の存在を認め^{たましい}た。魂^{たましい}によつて統べられない手・脚・頭・爪・腹等が、人間ではないように、一つの靈がこれを統べるのでなくて、どうして単なる線の集合が、音と意味とを有つことが出来ようか。

この発見を手始めに、今まで知られなかつた文字の靈の性質が次第に少しずつ判つて来た。文字の精靈の数は、地上の事物の数ほど多い、文字の精は野^{のねずみ}鼠^{ねずみ}のように仔^こを産んで殖^ふえる。

ナブ・アへ・エリバはニネヴェの街中を歩き廻^{まわ}つて、最近に文字を覚えた人々をつかまえては、根気よく一々^{たず}尋ねた。文字を知る以前に比べて、何か変つたようなところはない

かと。これによつて文字の靈の人間に対する作用を明らかにしようといふのである。さて、こうして、おかしな統計が出来上つた。それによれば、文字を覚えてから急に蝨を捕るのが下手になつた者、眼に埃が余計はいるようになった者、今まで良く見えた空の鷺の姿が見えなくなつた者、空の色が以前ほど碧くなくなつたといふ者などが、圧倒的に多い。「文字ノ精ガ人間ノ眼ヲ喰イアラスコト、猶、蛆虫ガ胡桃ノ固キ殻ヲ穿チテ、中ノ実ヲ巧ニ喰イツクスガ如シ」と、ナブ・アへ・エリバは、新しい粘土の備忘録に誌した。文字を覚えて以来、咳が出始めたといふ者、くしゃみが出るようになって困るといふ者、しゃつくりが度々出るようになった者、下痢するようになった者なども、かなりの数に上る。「文字ノ精ハ人間ノ鼻・咽喉・腹等ヲモ犯スモノノ如シ」と、老博士はまた誌した。文字を覚えてから、にわかには頭髪が薄くなつた者もいる。脚の弱くなつた者、手足の顫えるようになった者、顎がはずれ易くなつた者もいる。しかし、ナブ・アへ・エリバは最後にこう書かねばならなかつた。「文字ノ害タル、人間ノ頭腦ヲ犯シ、精神ヲ痲痺セシムルニ至ツテ、スナワチ極マル。」文字を覚える以前に比べて、職人は腕が鈍り、戦士は臆病になり、獵師は獅子を射損うことが多くなつた。これは統計の明らかに示す所である。文字に親しむようになってから、女を抱いても一向楽しゆうなくなつたといふ訴えも

あつた。もつとも、こう言出したのは、七十歳さいを越こした老人であるから、これは文字のせいではないかも知れぬ。ナブ・アへ・エリバはこう考えた。埃及人は、ある物の影かげを、その物の魂の一部と見做みなしているようだが、文字は、その影のようなものではないのか。

獅子という字は、本物の獅子の影ではないのか。それで、獅子という字を覚えた獵師は、本物の獅子の代りに獅子の影を狙ねらい、女という字を覚えた男は、本物の女の代りに女の影を抱くようになるのではないか。文字の無かつた昔むかし、ピル・ナピシユテムの洪水こうすい以前には、歓よろこびも智慧ちえもみんな直接に人間の中にはいつて来た。今は、文字の薄被ヴェイルをかぶつた歓よろこびの影と智慧の影としか、我々は知らない。近頃人々は物もの憶おぼえが悪くなつた。これも文字の精の悪いたずら戯である。人々は、もはや、書きとめておかなければ、何一つ憶えることが出来ない。着物を着るようになって、人間の皮膚ひふが弱く醜みにくくなつた。乗物が発明されて、人間の脚が弱く醜みにくくなつた。文字が普ふ及きゆうして、人々の頭は、もはや、働かなくなつたのである。

ナブ・アへ・エリバは、ある書物狂きやうの老人を知っている。その老人は、博学なナブ・アへ・エリバよりも更に博学である。彼は、スメリヤ語やアラメヤ語ばかりでなく、紙草パピルスや羊皮紙に誌された埃及文字まですらすらと読む。およそ文字になつた古代のことで、彼

の知らぬことはない。彼はツクルチ・ニニブ一世王の治世第何年目の何月何日の天候まで知っている。しかし、今日の天気は晴か曇か気が付かない。彼は、少女サビツがギルガメシユを慰めた言葉をも諳んじている。しかし、息子をなくした隣人を何と云つて慰めてよいか、知らない。彼は、アダツド・ニラリ王の後、サムラムマトがどんな衣装を好んだかも知っている。しかし、彼自身がどんな衣服を着ているか、まるで気が付いていない。何と彼は文字と書物とを愛したのであろう！ 読み、諳んじ、愛撫するだけではあきたらず、それを愛するの余りに、彼は、ギルガメシユ伝説の最古版の粘土板を噛砕き、水に溶かして飲んでしまったことがある。文字の精は彼の眼を容赦なく喰い荒し、彼は、ひどい近眼である。余り眼を近づけて書物ばかり読んでいたので、彼の驚形の鼻の先は、粘土板と擦れ合つて固い胼胝が出来ている。文字の精は、また、彼の脊骨をも蝕み、彼は、臍に顎のくつつきそうな僂僂である。しかし、彼は、恐らく自分が僂僂であることを知らないであろう。僂僂という字なら、彼は、五つの異つた国の字で書くことが出来るのだが。ナブ・アヘ・エリバ博士は、この男を、文字の精霊の犠牲者の第一に数えた。ただ、こうした外観の惨めさにもかかわらず、この老人は、実に——全く羨ましいほど——いつも幸福そうに見える。これが不審といえ、不審だったが、ナブ・アヘ・エリバは、それも

文字の靈の媚藥びやくのごとき奸猾かんかつな魔力まりよくのせいと見做した。

たまたまアシウル・バニ・アパル大王が病に罹かかられた。侍医じいのアラツド・ナナは、この病輕からずと見て、大王のご衣裳を借り、自らこれをまとうて、アツシリヤ王に扮ふんした。これによつて、死神エレシユキガルの眼を欺あざむき、病を大王から己おのれの身に転じようというのである。この古来の医家の常法に對して、青年の一部には、不信の眼を向ける者がある。

これは明らかに不合理だ、エレシユキガル神ともあろうものが、あんな子供だま瞞だましの計に欺かれるはずがあるか、と、彼等らは言う。碩せき学がくナブ・アヘ・エリバはこれを聞いて厭いやな顔をした。青年等のごとく、何事にも辻褄つじつまを合せたがることの中には、何かしらおかしな所がある。全身垢あかまみれの男が、一ヶ所だけ、例えば足の爪先だけ、無闇に美しく飾かざつてゐるような、そういうおかしな所が。彼等は、神秘の雲の中における人間の地位をわきまえぬのじゃ。老博士は浅薄せんぱくな合理主義を一種の病と考へた。そして、その病をはやらせたものは、疑もなく、文字の精靈である。

ある日若い歴史家（あるいは宮廷の記録係）のイシユデイ・ナブが訪ねて来て老博士に言った。歴史とは何ぞや？ と。老博士が呆あきれた顔をしているのを見て、若い歴史家は説明を加えた。先頃のバビロン王シヤマシユ・シユム・ウキンの最期さいがいについて色々な説があ

る。自ら火に投じたことだけは確かだが、最後の一月ほどの間、絶望の余り、言語に絶した淫蕩いんとうの生活を送ったというものもあれば、毎日ひたすら潔斎けつさいしてシヤマシユ神に祈り続けたというものもある。第一の妃ひただ一人と共に火に入ったという説もあれば、数百の婢ひしよ妾まきを薪の火に投じてから自分も火に入ったという説もある。何しろ文字通り煙けむりになつたこととて、どれが正しいのか一向見当がつかない。近々、大王はそれらの中の一つを選んで、自分にそれを記録するよう命じたもうであろう。これはほんの一例だが、歴史とはこれでいいのであろうか。

賢明けんめいな老博士が賢明な沈黙ちんもくを守っているのを見て、若い歴史家は、次のような形に問を変えた。歴史とは、昔、在つた事柄ことをいうのであろうか？ それとも、粘土板の文字をいうのであろうか？

獅子狩かりと、獅子狩の浮彫うきぼりとを混同しているような所がこの問の中にある。博士はそれを感じたが、はつきり口で言えないので、次のように答えた。歴史とは、昔在つた事柄で、かつ粘土板に誌しるされたものである。この二つは同じことではないか。

書洩かきもらしは？ と歴史家が聞く。

書洩らし？ 冗談じょうだんではない、書かれなかつた事は、無かつた事じや。芽の出ぬ種子たね

は、結局初めから無かったのじやわい。歴史とはな、この粘土板のことじや。

若い歴史家は情なさそうな顔をして、指し示された瓦を見た。それはこの国最大の歴史家ナブ・シヤリム・シユヌ誌す所のサルゴン王ハルデア征討行の一枚である。話しながら博士の吐き棄てた柘榴の種子がその表面に汚らしくくつついている。

ボルシツパなる明智の神ナブウの召使いたもう文字の精霊共の恐しい力を、イシユデイ・ナブよ、君はまだ知らぬとみえるな。文字の精共が、一度ある事柄を捉えて、これを己の姿で現すとなると、その事柄はもはや、不滅の生命を得るのじや。反対に、文字の精の力ある手に触れなかつたものは、いかなるものも、その存在を失わねばならぬ。太古以来のアヌ・エンリルの書に書上げられていない星は、なにゆえに存在せぬか？ それは、彼等がアヌ・エンリルの書に文字として載せられなかつたからじや。大マルズク星（木星）が天界の牧羊者（オリオン）の境を犯せば神々の怒が降るのも、月輪の上部に蝕が現れればフモオル人が禍を蒙るのも、皆、古書に文字として誌されてあればこそじや。古代スメリヤ人が馬という獣を知らなんだのも、彼等の間に馬という字が無かつたからじや。この文字の精霊の力ほど恐ろしいものは無い。君やわしらが、文字を使って書きものをするなどと思つたら大間違い。わしらこそ彼等文字の精霊にこき使われる下僕じや。しか

し、また、彼等精靈の齎す害も随分ひどい。わしは今それについて研究中だが、君が今、歴史を誌した文字に疑を感じるようになったのも、つまりは、君が文字に親しみ過ぎて、その靈の毒氣に中つたためであろう。

若い歴史家は妙な顔をして帰って行つた。老博士はなおしばらく、文字の靈の害毒があの有為な青年をも害おうとしていることを悲しんだ。文字に親しみ過ぎてかえつて文字に疑を抱くことは、決して矛盾ではない。先日博士は生来の健啖に任せて羊の炙肉をほとんど一頭分も平らげたが、その後当分、生きた羊の顔を見るのも厭になつたことがある。

青年歴史家が帰つてからしばらくして、ふと、ナブ・アへ・エリバは、薄くなつた縮れつ毛の頭を抑えて考え込んだ。今日は、どうやら、わしは、あの青年に向つて、文字の靈の威力を讚美しはせなんだか？ いまましいことだ、と彼は舌打をした。わしまでが文字の靈にたぶらかされておるわ。

実際、もう大分前から、文字の靈がある恐しい病を老博士の上に齎していたのである。それは彼が文字の靈の存在を確かめるために、一つの字を幾日もじつと睨み暮した時以来のことである。その時、今まで一定の意味と音とを有つていたはずの字が、忽然と分解

して、単なる直線どもの集りになつてしまつたことは前に言つた通りだが、それ以来、それと同じような現象が、文字以外のあらゆるものについても起るようになった。彼が一軒の家をじつと見ている中に、その家は、彼の眼と頭の中で、木材と石と煉瓦と漆喰との意味もない集合に化けてしまう。これがどうして人間の住む所でなければならぬか、判らなくなる。人間の身体を見ても、その通り。みんな意味の無い奇怪な形をした部分部分に分析されてしまう。どうして、こんな恰好をしたものが、人間として通つていゝのか、まるで理解できなくなる。眼に見えるものばかりではない。人間の日常の営み、すべての習慣が、同じ奇体な分析病のために、全然今までの意味を失つてしまつた。もはや、人間生活のすべての根柢が疑わしいものに見える。ナブ・アへ・エリバ博士は気が違ひそうになつて来た。文字の靈の研究をこれ以上続けては、しまいにその靈のために生命をもられてしまうぞと思つた。彼は怖くなつて、早々に研究報告を纏め上げ、これをアシユル・バニ・アパル大王に献じた。但し、中に、若干の政治的意見を加えたことはもちろんである。武の国アツシリヤは、今や、見えざる文字の精靈のために、全く蝕まれてしまつた。しかも、これに気付いている者はほとんど無い。今にして文字への盲目的崇拜を改めずんば、後に臍を噬むとも及ばぬであろう云々。

文字の霊が、この讒謗者をただで置く訳が無い。ナブ・アヘ・エリバの報告は、いたく大王のご機嫌を損じた。ナブウ神の熱烈な讚仰者で当時第一流の文化人たる大王にしてみれば、これは当然のことである。老博士は即日謹慎を命ぜられた。大王の幼時からの師傅たるナブ・アヘ・エリバでなかつたら、恐らく、生きながらの皮剥に処せられたであろう。思わぬご不興に愕然とした博士は、直ちに、これが奸譎な文字の霊の復讐であることを悟った。

しかし、まだこれだけではなかつた。数日後ニネヴェ・アルベラの地方を襲つた大地震の時、博士は、たまたま自家の書庫の中にいた。彼の家は古かつたので、壁が崩れ書架が倒れた。夥しい書籍が——数百枚の重い粘土板が、文字共の凄まじい呪の声と共にこの讒謗者の上に落ちかかり、彼は無慙にも圧死した。

(昭和十七年二月)

青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学全集 中島敦」 「ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年7月20日第1刷発行

底本の親本：「中島敦全集 第一巻」筑摩書房

1987（昭和62）年9月

初出：「文学界」

1942（昭和17）年2月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※初出時の表題は「古譚」です。

入力：野口英司

校正：野口英司、富田倫生

1997年11月17日公開

2014年1月17日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

文字禍

中島敦

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>